

大学生の学習が新規大卒就職に及ぼす影響の再検討 —専攻分野・地域別の比較から—

林川 友貴（東京大学大学院）

1. 問題設定

本研究の目的は、大学生の日常的な学習行動が、就職活動に与える影響を明らかにすることである。具体的には、各学生の学習時間や受講している授業の種類が、就職活動での内定獲得に与える影響を検討していく。

教育社会学や隣接学問領域における、大卒就職の計量的研究においては、内定獲得・内定先企業規模・就職活動などを指標として、大学の成績や学習経験の効果の検証が行われてきた。しかし既存の研究については、①就職活動開始前の学習行動や、大学教育に対する認識などの変数については、その多くが回顧的な質問によって得られた変数しか利用できていない、②学生の属性に関する諸変数が学習に関する意識・行動自体に影響を与えるという側面をうまく捉えきれていない、③文系／理系や大都市圏／非大都市圏といった異なる文脈間でのメカニズムの違いを描ききれていない、という問題点が指摘できる。

これらの問題点をふまえ、本研究においては、縦断データから得られた変数を用い（問題①への対応）、各変数が就職活動の成否に与える効果について学習行動を媒介する効果と直接的な効果を識別した分析を行い（②への対応）、その分析結果を専攻分野や地域ごとに比較する（③への対応）ことで、大学での学習が就職活動に与える影響についてのより精緻なメカニズムの解明をめざしたい。

2. データ

本研究では、東京大学大学経営・政策研究センターが実施した「高校生の進路についての追跡調査」のデータを分析に用いる。本調査は、層化二段無作為抽出法によるエリアクォータサンプリングによって全国から選ばれた、4000人の高校三年生（2005年時点）を対象として、2005～2011年の時期に6回にわたって実施された追跡調査である。本研究においては、現役で四年制大学に進学し、就職活動についての回答が第5回調査（2009年12月実施）において得られているサンプル（N = 676）に限定して分析を行った。

3. 分析結果

まず、今回の分析対象となっている大学生の学習のパターンを探索的に捉えるために、「将来の仕事に役立つ知識や技術を身につけられる」「自分の興味・関心に合った授業が多い」という、大学での学びについての認識に関する2変数と、「授業への出席」「授業や課題に向けた準備や復習」「授業とは関係のない学習」の各々について一週間あたりの平均時間を訪ねた3変数を用いて、潜在クラス分析を行った。ブートストラップ法を用いた尤度比検定の結果、4クラスモデルが妥当であると判断された。潜在クラスの構成割合とクラスごとの条件付き応答確率は、表1の通りであり、クラス1（構成割合42.7%）は、学習時間は長い学習に積極的な意義を感じてい

ない層、クラス 2 (30.7%) は、学習時間も学習への意義付けも低水準に抑えられている層、クラス 3 (16.6%) は大学での学びに意義は感じているものの学習時間自体はあまり

表 1 潜在クラス分析の結果(4 クラスモデル)

		クラス1	クラス2	クラス3	クラス4
クラス構成割合		42.7%	30.7%	16.6%	10.1%
各変数 肯定割合					
仕事に役立つ知識や技術を身につけられる	肯定	0.000	0.072	1.000	1.000
	否定	1.000	0.928	0.000	0.000
興味・関心に合った授業が多い	肯定	0.109	0.054	0.380	0.479
	否定	0.891	0.946	0.620	0.521
授業への出席(週あたり時間)	10時間以下	0.051	0.478	0.288	0.031
	11~20時間	0.419	0.444	0.311	0.313
	21時間以上	0.531	0.078	0.402	0.656
授業や課題に向けた準備や復習(週あたり時間)	0時間	0.048	0.246	0.127	0.029
	1~5時間	0.540	0.754	0.873	0.000
	6時間以上	0.412	0.000	0.000	0.971
授業とは関係のない学習(週あたり時間)	0時間	0.437	0.703	0.516	0.549
	1~5時間	0.444	0.257	0.449	0.283
	6時間以上	0.118	0.040	0.035	0.169

N=676

長くない層、クラス 4 (10.1%) は、大学での学習に積極的な意義を見出しており、授業外を含めた学習時間も長い、という特徴を見出せる。また図表は省略するが、これらの各クラスへの所属を高める要因を多項ロジット潜在クラス回帰モデル(参照カテゴリ: クラス 1)によって推定したところ、クラス 2 については女子ダミー(-)、世帯収入(+)、理系ダミー(-)、クラス 3 については女子ダミー(+)、父大卒ダミー(-)、理系ダミー(+)、クラス 4 については女子ダミー(+)、父大卒ダミー(+)、理系ダミー(+)が有意な影響を与えていた。

続いて、内定獲得の有無を従属変数とし、学習に関する潜在クラスや成績における優の割合の効果を、統制変数を投入したうえで文理別に確認したのが、表 2 の二項ロジットモデルの推定結果である。

文系においては、成績における優の割合や課外活動が内定獲得に有意な正の影響を与えている一方で、理系においては学習に関する潜在クラスのクラス 4 への所属が正に有意な影響を与えていた。

表 2 二項ロジットモデルの結果

	文系	理系
週あたりアルバイト時間	0.034 * [0.015]	-0.003 [0.022]
週あたりクラブ・サークル活動時間	0.036 ** [0.012]	0.015 [0.019]
成績における優の割合	0.076 + [0.044]	0.071 [0.074]
潜在クラス (基準: クラス1)		
クラス2	0.187 [0.230]	-0.372 [0.453]
クラス3	-0.073 [0.278]	0.034 [0.394]
クラス4	0.173 [0.396]	1.322 * [0.601]
N	481	195
Cox-Snell R square	0.052	0.100

** : p < 0.01, * : p < 0.05, + : p < 0.10

※紙幅のため投入した変数のうち一部の推定値のみを提示。

また図表は省くが、大都市圏と非大都市圏との比較では、顕著な差異はみられなかった。

4. 議論と今後への課題

分析の結果から、大学での学習が就職活動に影響を及ぼすメカニズムは、文系と理系で異なっていることが示唆された。学習への積極的な取組み自体が内定獲得と正の関連をもつのが理系であり、学習の結果=成績が内定獲得に正の影響をもつのが文系である。

本研究の課題としては、(1) データの制約により、重要な変数である大学ランクを分析に組み込めなかったこと (2) 特に理系に多い、大学院進学後の就職活動が分析対象から抜け落ちてしまっていること、が挙げられる。

※ 引用文献及び詳細な図表は当日提示する。

※ 二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから〔「高校生の進路についての追跡調査(第1回~第6回) 2005-2011」(東京大学 大学経営・政策研究センター)〕の個票データの提供を受けた。記して感謝申し上げる。